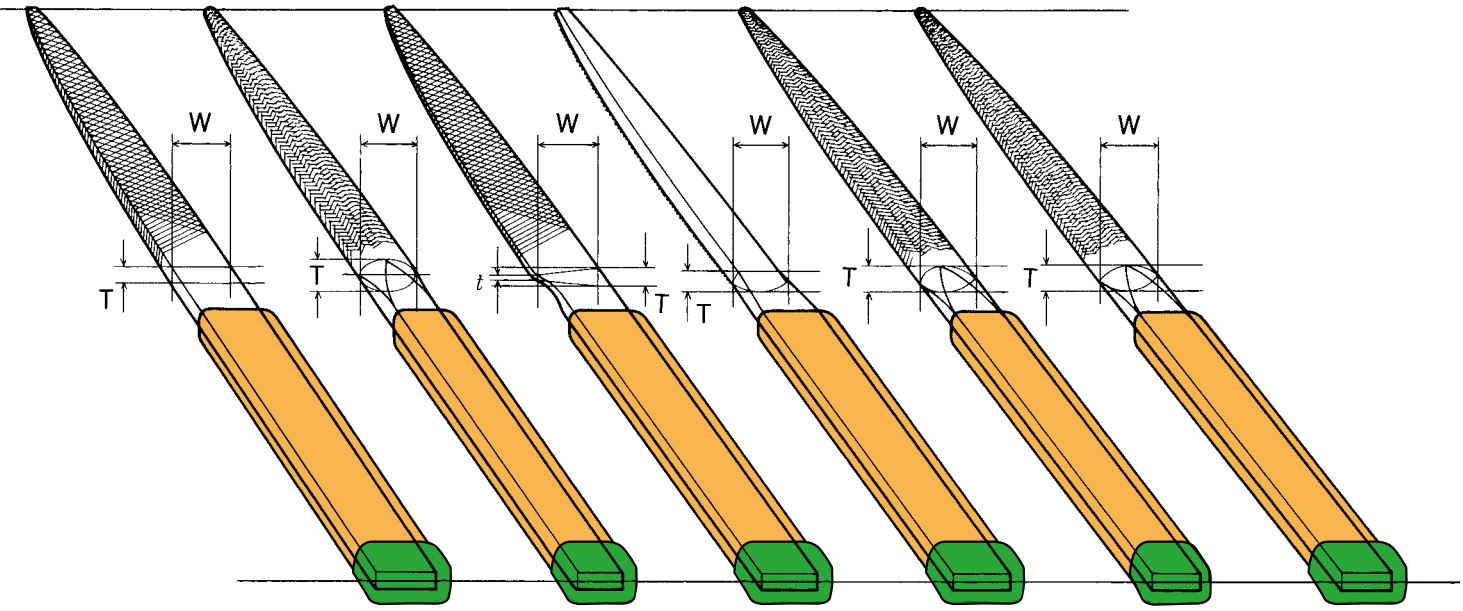
LONG LIFE DESIGN

PRICE-KUMI



先細 FLAT　楕円 OVAL　刀刃 KNIFE　腹丸 BALANCE EDGE　ハマグリ CLAM　両甲 AURI-FORM

	先細 FLAT	楕円 OVAL	刀刃 KNIFE	腹丸 BALANCE EDGE	ハマグリ CLAM	両甲 AURI-FORM	1箱入数 No. / BOX
	W × T mm	W × T mm	W × T × t mm	W × T mm	W × T mm	W × T mm	BOX COLOR
	(11) × (3.5)	(11) × (6.5)	(13) × (3.5) × (2.0)	(12) × (3.5)			BOX 25 pcs
	1.50	1.80	1.48	1.48			
	(5)	(5)	(5)	(5)			CARTON 600 pcs
	SH 005 ＊＊	DE 005 ＊＊	KH 005 ＊＊	HM 005 ＊＊			
	9 × 3.0	9 × 4.5	(11) × (3.0) × (1.5)	(9.5) × (3.0)			BOX 40 pcs
	1.40	1.62	1.60	1.62			
	8	8	(8)	(8)			CARTON 800 pcs
	SH 008 ＊＊	DE 008 ＊＊	KH 008 ＊＊	HM 008 ＊＊			
	7 × 2.5	7 × 3.4	8.2 × 2.5 × 1.0	7.3 × 2.5			BOX 50 pcs
	1.32	1.24	1.20	1.30			
	10	10	10	10			CARTON 1000 pcs
	SH 010 ＊＊	DE 010 ＊＊	KH 010 ＊＊	HM 010 ＊＊			
	4 × 2.0	4 × 2.5	4.5 × 2.0 × 1.0	4.2 × 2.0	4.2 × 2.2	4.0 × 2.2	BOX 60 pcs
	0.76	0.82	0.72	0.70	0.78	0.82	
	12	12	12	12	12	12	CARTON 1200 pcs
	SH 012 ＊＊	DE 012 ＊＊	KH 012 ＊＊	HM 012 ＊＊	HG 012 ＊＊	RK 012 ＊＊	

- 荒目 Bastard Cut ①
- 中目 2nd. Cut ②
- 細目 Smooth Cut ③
- 油目 D. Smooth Cut ④

やすり八題 ❷

苅山　信行

古墳から出土する鉄器は、全体が錆（さび）に覆われているので、表面性状は分からないことが多い。そのような理由で「確実にやすりと認められるものは、国内では出土していない」といわれているのではないだろうか。

国内で出土している唯一のやすりらしき物は、倉敷市の倉敷考古館に展示してある。

この物は総社市西阿曽の随庵古墳（五世紀後葉）から鉄鉗（かん）、鉄床、鉄鎚（つい）、砥石（といし）などと一緒に出土している。「外観は全長34.5㌢、そのうち柄部6㌢は木柄の痕跡をとどめている。身部は幅3㌢、厚さ5㍉の短冊形品で、先端にも両側にも刃はついていない。完全品があって、用途は不明である。あるいは鑢ではないかと思っている。しかし、銹化していてそれを確かめ得ない」と報告書は結んでいる。

鍛造工具や砥石と一緒に出土していることなどから考えて、この物はやすりであるとしても不合理はないと思う。

例えば、刃物（鉄器）を作ることを想定してみよう。鍛造であらかたの形を作り、次にやすりで形を整え、最後に砥石で仕上げの研磨をする。この工程からやすり作業を省くと、砥石での研磨に時間がかかり過ぎて非常に無理がある。砥石での仕上げ前に、やすりがけが必要なのである。

五千年の歴史を持ち、冶（や）金技術をリードした中国では、四本の銼（やすり）が出土している。

河北省の満城漢墓（BC113年）から出土した銼の報告書は、次のように説明している。「細長い形で一端が破損している。片面の半分に横平行にやすり歯が刻まれていて、1㌢の中に六個の歯がある。現在の『馬歯形やすり』に類似しており、木やすり類に属する。残っている長さは20.4㌢、幅1㌢、厚さ0.3～0.5㌢である」

日本の『和漢三才図会』に出ている雁岐鑢（がんぎやすり）に非常によく似ている。中国では馬の歯形と表現し、日本では石段のガンギだと形容している。（広島県立西部工業技術センター主任研究員＝呉市）

馬の歯形

緑地帯　3. 9. 27　中国新聞より